

存覚と『報恩記』

——三州義士譚を中心に——

龍 口 恭 子

はじめに

存覚は正応三年（一二九〇）、本願寺宗主覚如の長男として生まれる。十代後半、奈良で勉強の後、二十一歳より、父に随逐して地方の教化に赴き、また後には自身、各地に居留して教線を張った。さらに著作を通して親鸞の思想を宗学として確立することに腐心したのであるが、それらの述作は該博であると共に緻密であり、後世の宗学は存覚に負うところが大きい。その中で『報恩記』（暦応元年一三三八）は、小品であり、内容が存覚の思想的中核をなすものとみなされなかったためであろうか、従来その研究は必ずしも進んでいるとは言えない。

本論では『報恩記』の文献的分析により、『報恩記』著述の意図を探り、存覚の思想の一端に触れてみたい。

一、『報恩記』の成立

存覚の自伝『存覚一期記』（一三七三年）によれば、存覚四十九歳の暦応元年三月は備前に滞在していて、この地で『仮名報恩記』を著わしている。また存覚の生涯を詳細に辿った寂慧『鑑古録』（一二七二年）によれば、

暦応元年。存師四十九歳三月。備後ノ国ニシテソノ国ノ守護某ノ亭ニテ。日蓮派ノ僧輩ト法問アリ。・・コノトキ同国山南ノ・・

（真宗全書 第六十八巻 三七三頁）とあり、存覚の本書執筆動機の一つに、願空なる人物からの執筆要請があることが知られ、他に『決智鈔』『歩船鈔』等も同時期に書かれたことが記されている。

存覚は『報恩記』冒頭に、

孝養父母は百行の本なり、内典にも外典にもこれをすすむ。報恩謝徳は衆善のみなもとなり。（真聖全 三 二五六頁）

と父母の恩を述べ、『報恩記』第二段では、奉事師長はこれも三福の随一として三世の諸仏の大悲にかなふべきなり。（同 二七一頁）

として、以下、師の恩徳を述べ、父母にまさる師の恩を説く。第三段は第一段の「父母の恩」、第二段の「師の恩」を承けて、これらへ「報恩」すべきを説き、結論として、

生前にもとも尊重頂戴のころさしをぬきんで没後にも殊に追修追善のつとめを致すべきなり。その追善のつとめには念仏第一なり。

(同 二八〇頁)

本稿では『報恩記』の父母・師への報恩の思想のうち、父母への報恩、即ち「孝養」を取り上げて言及したい。

二、『報恩記』と孝養

「孝」は儒教の徳目の一つであることは無論であるが、仏教においても『長阿含経』を初めとして、『観無量寿経』においても三福の内の「世福」の中で重要なものとして位置づけている。従って、中古・中世の孝子譚の隆盛については、日本の思想史において、儒教・仏教両面からの考察が必要であるが、今存覧の立場に立つてこれを考える時、存覧は、

しかるに孝養報恩の勤めは現当にわたり内外に通ずべし。しかれども外典にいふところは今生を本とし、聖教に明すところは得脱をむねとするがゆへに、現世一旦の孝養は夢の中の報恩なればなを真実にあらず、没後の追善をいとなみてかの菩提をとぶらはんはまめやかな孝養となるべきなり。

(同 二五七頁)

と、儒教的立場では善行ではあつても一世にとどまり、仏教

的立場は二世に亘る善行とするのである。そして『孝経』『劉熙釈名』『諡法』『礼記』『梵網経』『観無量寿経』『心地観経』等、多数の文献を引用して例証する。

存覧は浄土真宗を教団として組織して行くにあたって、様々な方法を用いたのであるが、その一つに、当時の庶民の感覚に根ざした思考を重んじ、それに沿った教義展開をなしたことが推察される。即ち、この時代の情勢に応じて、親鸞の教義をわかりやすく解釈し直したり、またこの時代に起こった問題に対して浄土真宗教団の立場を明確に打ち出して行つたのである。これについて、細川行信氏は「他宗・他流に比べて微々として振わない浄土真宗を興隆する為、要望に応えて執つたのが与奪の手段¹⁾」として、聖道諸宗・浄土他流・儒教・神道・民俗信仰・女人・陰陽道に対して「對抗誘因」しているとする。即ち浄土真宗興隆のために、当時の民衆が欲しているものを分析し、その解答を与えようとしていたと考えられる。その一つに「孝養」があつたと言えよう。

「孝養」は当時の民衆にとって、重要な徳目の一つであり、実践事のひとつであつた。その具体的な現われとして、当時の孝子譚の非常な隆盛をあげることができであろう。中古・中世の仏書・文学作品には多数の孝子譚を見出すことができるが、それらは中国の典籍に挙げられる多大な数の孝子譚に倍したものである。ここでは『報恩記』中の一話を取り上げ

て、孝子譚の隆盛を伺い、流布の一端を探ってみた。

三、三州義士の話

ここに取り上げるのは「三州の義士」の話である（真聖全三二六七頁）。ある道の辻に三方から来た三人の男はそれぞれに父を亡くしたものであったが、そこにやって来た息子を亡くした翁を父として、孝養を尽くす。ある時翁は三士の孝養の心を試すために言う。「大河の中に殊勝の宮殿を造りその中に我を置かしめよ」と。激流の中で三士は宮殿を造ることを試みること七日間、三人が途方に暮れた時、天地がこの志に動いて、喜見城もかくやと思われる壮大な宮殿が現出し、その内より孝の心を讃歎するというものである。

『報恩記』にはこの話の典拠を、「是は『阿含経』の説より出でたり。」（同 二六七頁）としているが、今、『阿含経』の中にこの話を見出すことはできない。講録『報恩記講述』にも、

さてこの三州義士の因縁は次に阿含経の説より出てたりとのたまへど古来阿含経にこの説なしと申すなり。

（真宗大系 二八巻 三七二頁）

としている。ただし『直談因縁集』には「善逝に付て阿含経云。」とあり、管見の範囲では、經典中の典拠を示すのはこの例のみであるが、或いはこの話を『阿含経』に結びつけた伝

承があつたのかもしれない。

さてこの話は次のような文献に見られる。『船橋本孝子伝』巻上ノ八・『陽明文庫本孝子伝』・『今昔物語集』巻九ノ四十六・『注孝選』第五八・『私聚百因縁集』巻六ノ十二。同話は中国の『太平広記』巻一六一、三州人・『太平御覧』巻六一地部二六、河祥瑞等に見える。殊に近年、寺院の唱導書関係の資料の調査、及び紹介、翻刻などによって多くの新資料が明らかにされつつあるが、その成果として、『金玉要集』一、養父、寛朝草・『直談因縁集』一ノ四三・『孝行集』（静嘉堂文庫蔵）第六、等がある。

かく本話は広く親しまれた話であるが、その広範な流布の形跡が伺えるのは、安居院の唱導集『言泉集』に、

三州氏之有精誠也得神靈於波間。五郡之致孝行也。顯天威於河内。晋三州五郡契現生有其孝感。²

からも明らかである。三州義士の説話はこの『言泉集』にある如く五郡孝子の話と対になって伝承されたことが知られるのであるが、その源泉を尋ねると、隋の天台智顗の『摩訶止観』第四ノ三に、

夫違親離師本求要道。更結三州還敦五郡意欲何之。

（大正蔵第四六巻 二五頁）

とあり、これに注釈を加えた唐荊溪湛然『止観輔行伝弘決』に『肅広濟孝子伝』からこの二話の孝子譚が引用されている。

この孝子譚は『太平御覽』や『太平広記』等、類書からの流布も考えられるが、『摩訶止観』等、仏典を通して受容されたことが想像される。これを裏付けけるものとして、院政期の説教の聞き書『法華百座聞書抄』の天仁三年（一一二〇）三月二十七日条、興福寺の大輔得業覚誓の説法に五郡孝子の話が流暢に語られ、追善法要に用意された書写經典の亡き父母への回向を「孝養報恩」と讀んでいる。孝子譚の受容の形態から、儒教の徳目である「孝」の思想が仏教とどのように関わって来たか、その一端を知ることができるのである。

さて前記のような多くの典籍の中から『報恩記』の典拠と考えられるものをあげるとすれば、説話の類似、思想内容から、住信が編纂した『私聚百因縁集』にしばられる。三州義士の話は、諸伝承の儒教の孝子伝の系統、『太平御覽』等百科全書系のもの、『摩訶止観』からの伝承、等があるが、念仏の因縁譚を多く収集した仏教説話集『私聚百因縁集』が最も多くの類似点を有している。

殊に他の説話と大きく異なる点は、他の説話集では三州から寄った三人のうち一人の年長の人を親と仰ぎ、二人が孝子として仕えるという説話展開に対して、『報恩記』は三人が寄り、そこにやって来た一老翁を父と仰ぐというもので、この展開が見られるのは『私聚百因縁集』のみである。なお『私聚百因縁集』が『注好撰』を典拠としていることについて

存覚と『報恩記』（龍 口）

は、既に今野達氏の論がある。ただし『注好撰』から『私聚百因縁集』へは相当の改変が見られるが、『私聚百因縁集』から『報恩記』へは大部分を踏襲している。しかも巧みに『私聚百因縁集』の論理を用いつつ、存覚独自の「念仏」の論理を展開している。次の部分にはそれが顕著である。

既に実の親にあらざるを親と名付けて親子を契ざる其の義を乱らざれば、仏天随喜したまふ。況や正しく幼少より摩頂養育を得る、其の恩を報ずる養子をや。如何に況や実の父母の恩徳報ぜん孝子をや。我等三界流浪の空子なり。三州義士の如し。釈尊は三乘愛護の慈父なり。一路老翁に似たり。彼命に順がば、豈に生死の大河の中に不退の殿を設けざらんや。

（大日本仏教全書『私聚百因縁集』 一〇六頁）
今此の因縁を案ずるに、実の親にはあらざれども親と名けて孝行の志を致ししかば、仏天随喜して加様の不思議あり。何況や多生の宿縁に依てをや。報しても猶報じ、謝してもまた謝すべきなり。つらつらこれを思ふに我等は三界流浪の孤（みなしご）なり。かの三州の義士の如し。釈尊は衆生覆護の慈父なり。か一路の老翁に似たり。しかれば釈尊の教勅に順じて弥陀の名号を称せば、生死の大海の中に何ぞ不退の宮殿をまうけざらんや。よくよくこれと思うべし。

（真聖全 三『報恩記』二六九頁）

四、『報恩記』の説話引用態度

1、孝養説話の流布

存覚が孝養について一著をなすことを思い立ったのは、直接的には本稿の最初に述べたように、備前での從憑があったからであろうが、四ヶ月という短期間での『決智鈔』『歩船鈔』『法華問答』『至道鈔』『選択注解鈔』及びこの『報恩記』等、六部の書の執筆ということを事実とすれば、多数の文献の引用からみても、思いつきをさらさらと書き留めた訳ではないであろう。恐らく当時の情勢を踏まえた綿密な準備があったはずである。

本書のテーマである「孝養」にしぼると、「孝養」に関する各宗派の著述の盛行の状況がある。日蓮『報恩抄』・伝覚鑱『孝養集』（十二世紀の成立か）・中世説話集『孝行集』（静嘉堂文庫）・安居院唱導書『金玉要集』（内閣文庫）等があり、これら「孝養」に関する書の盛行が、このテーマに関する書の執筆を思い立たせる動機の一つであったことに違いない。

2、虎関師鍊との交流

存覚は『報恩記』においてまとまった説話を取り入れているが、このような形態を試みた要因の一つとして、『元亨釈書』等の編者として知られる虎関師鍊との接触が考えられる。『鑑古録』によれば、存覚四十二歳の時、

正月二十二日関東へ下向あるべしとて、まず湖東の瓜生津に逗留したまふその後上洛したまふ。・・存師も時々彼の寺（東福寺）へ往来あて、海蔵院の師鍊禪柄と入魂したまふ。

（真宗全書 第六十八巻 三七三頁）

として、東福寺に一時期居住した虎関師鍊との親しい交流を伝えている。師鍊は浩瀚な我が国の僧伝の集成である『元亨釈書』を完成させた禅僧であるが、『鑑古録』は二人について次のように語っている。存覚は東福寺の海蔵院に住した師鍊を折々に訪ねたが、ある時歓談し、共々両足を伸べて大いに寛いでいて二人とも眠りに落ちた。醒めて語り合ったところ大蔵經の蔵に入った同じ夢だったという。中国の子陵と光武帝の故事を引き、二人がまことに肝胆相照らす仲であり、共に学僧として卓越した存在であったことを讃えている。存覚はかかる交流の中で、説話を述作の中に取り入れる示唆が得られたのではないかと推考するのである。

3、『私聚百因縁集』との関連

前述のように、三州義士の説話伝承を整理すると、存覚が『報恩記』に採録した説話の典拠として最も可能性が高いのは住信の『私聚百因縁集』と言える。『私聚百因縁集』は正嘉元年（一二五七）住信が常陸で編集したもののだが、これを備前に居留した存覚が引用したとすれば、『私聚百因縁集』の広範な流布を知ることができ、住信の編集した説話集に目

を通していた存覚の姿勢もまた伺えるのである。存覚は恐らく民衆教化のために様々な情報の蒐集を試みたであろうが、その一つに浄土宗僧侶住信の編纂した『私聚百因縁集』があったと言える。

五、親鸞の孝と存覚の孝

さて親鸞の「孝養」についての言及として遍く知られているのは、『歎異抄』第五条の「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まふしたることいまださふらはず。」（真聖全一七七六頁）の語である。

即ち親鸞は、追善回向としての念仏の価値は全く認めていなかった。その理由は次のように示される。

一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、……わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して父母をもたすけさふらはめ。ただ自力をすてて、いそぎさとりをひらきなば、六道・四生のあひだいづれの業苦しづめりと、神通方便をもてまづ有縁を度すべきなり。（真聖全 二 七七六頁）

ここには、「孝養」についての親鸞の見解が述べられているのみならず、親鸞の念仏思想の根幹をなす絶対他力の思想が実に端的に示されており、「孝養」のための念仏を全否定する親鸞の姿勢が貫かれている。

存覚においては「孝養」はどのように捉えられていたのか。

あろうか。『報恩記』の中に次のような文言がある。
生前にもともと尊重頂戴のころざしをぬきんで、没後にも殊に追修追善のつとめを致すべきなり。その追善のつとめには念仏第一なり。（真聖全 三 二八〇頁）

現世の祈祷亡者の追修、念仏の功力に超たるはなく、弥陀の利益にすぐれたるはなし。（真聖全 三 二八〇頁）

存覚はここでは念仏の中に追善・追修の功力を認めており、同じ意味で「孝養」も捉えていることがわかる。これは親鸞の先の主張とは少し異なる。このような存覚の解釈を考えるにあたって、存覚の「神祇」についての解釈を、普賢晃寿氏は次のように述べているのが注目される。

親鸞においては本地垂迹説の受容は存しない。弥陀一仏への信より、明確に神祇不拝が主張されている。これに対し、専修念仏の徒に加えられた神祇不拝の非難に対し、存覚は本地垂迹説を受容し、律令仏教と同じ立場を取ることにより、答えているのである。

（普賢晃寿著『中世真宗教学の展開』四八二頁）
として、「神祇論の上に親鸞と異なつた時代思潮との迎合」を認めておられる。

同様のことは「孝養」についても言え、当時非常な隆盛を誇つた孝子譚を引用しつつ、孝養を説いており、その思想の根底には親鸞の思想との異なりが見られるが、その論理の展開はまことに巧みであり、かつ民衆の生活に根ざした発想で

あり、浄土真宗教団が教団として生成の過程を辿る模索の一つであつたと言えよう。

むすび

以上要するに、存覚は種々な形で浄土真宗教団の形成に尽力したが、そのひとつは当時流通していた「孝養」の思想の真宗的解釈である。儒教の思想として公布されている「孝」の觀念を仏教の思想として徹底させた。儒教の孝養は現世のみの福であるが、仏教の孝養は現世・当世の二世にわたる真実の報恩であり、念仏こそ第一の追善と説く。ここには庶民の感覚を巧みに捉え、念仏のあり方を模索した姿勢がみとれる。俗信仰の理解を徹底することによって、親鸞の教義の理解を示した。それは親鸞の厳しい「孝養」についての姿勢とはやや異なるが、浄土真宗の教団の方向を示すものの一つであつたと考えられる。

1 細川行信『真宗教学史の研究』一五六頁

2 拙稿「百座法談聞書抄」における五郡孝子譚の典拠（『文芸論叢』第二号 一九七四年三月刊）参照。

3 今野達「注好選集について——附私聚百因縁集成立考——」（『国語』第二卷 東京理科大学終結記念号 昭和二八年九月刊）

〈キーワード〉 存覚、親鸞、孝養、報恩記

It is said that “The Answer to the Kamakura Second Degree Zen Nun”(hereafter (1)) and “The Answer to Tsunoto no Saburo Entering the Way” (on September 18) (hereafter (2)) were written by Hōnen-bo Genkū. Because there are some similar sentences in them, it seems that one preceded the other.

The purpose of this paper is to examine which one was written first. I conclude that (2) was written first, then (1) was written relying on (2) by a later and different writer.

Having compared the contents of two letters, I have found that some sentences in (1) are out of context with (2). I have also found that some of the first half of each sentence are extremely similar, while the corresponding second halves are completely different. Therefore, I suppose that these two letters were written by different writers.

37. Zonkaku and the *Hōonki*

Kyoko TATSUGUCHI

Zonkaku (1290-1373) was the fourth generation descendant of Shinran, the founder of the Jōdoshin school of Japanese Buddhism. He traveled throughout Japan with his father Kakunyo, and wrote many books to spread Shinran's doctrine.

This paper will analyze his reason for writing the *Hōonki*. Zonkaku believed that filial piety in Buddhism is better than filial piety in Confucianism. In Confucianism filial piety brings happiness in this life, but in Buddhism filial piety brings happiness in both this life and the life to come. Nembutsu is the best expression of filial piety.

38. The Change of Time in Shinran's Thought: from the moment of death to the present life

Mikio TAKEDA

In my paper I wish to discuss Shinran's idea of the change of time. Shinran